



完全な状態で残っている建物は1戸だけ。後ろ半分はアパートに建て替えられている

### 兵隊自身が造った道

開拓使が明治15年(1882)に札幌・幌内炭鉱間に敷設した幌内鉄道は、明治22年(1889)から北海道炭鉱鉄道株式会社が経営していた。その後、沿線の月寒に独立歩兵大隊が新設されたために、明治36年4月21日に白石駅を開業した。

しかし駅へ行くまでの道路が悪かったので、明治38年(1905)、村の人が土地を寄付し、白石駅から月寒の連隊まで兵隊の人力で道路をつくり上げた。この道は連隊通と呼ばれるようになった。なお、豊平区では月寒中学校からまっすぐ旧月寒駅(今のアサヒビール工場付近)へ向かう道を「連隊道路」と

呼んでいる。当初は白石駅前からまっすぐに道路をつくる計画だったが、用地が取得できなかったために駅前に広場が造れず、通りも西にずれて、現在の状態となった。

大正7年(1918)に定山溪鉄道が白石駅始発として開通し、駅周辺は一層活気づいた。さらに昭和48年(1973)には経路変更で国鉄千歳線が白石駅経由となり、乗降客はますます増加した。

それでも昭和15年ころまで、今の駅前通と国道12号の間はカラマツの林が続き、家も4軒ほどしかなかった。

(塩見一釜)

### 区役所一帯は軍の補給基地の

#### 陸軍兵器補給廠

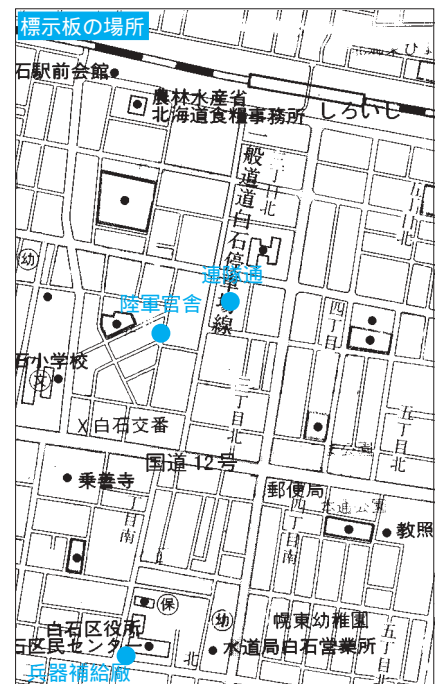
第二次世界大戦が始まり、昭和19年(1944)10月、白石に約38万平方メートルの土地に陸軍兵器補給廠が建てられた。北方戦線への兵器物資供給のためである。現在の白石区役所付近には210,000平方メートル(地図上で計算)、その他にも分散して建てられたようだ。

12棟の建物があり、大砲、機関銃などの武器貯蔵庫のほか、故障した兵器を修理する整備工場、医務局も



「郷土史南郷」掲載の補給廠の様子を現在の地図に重ねた

# 連隊通に沿ってできた 兵器補給廠と官舎



あったという。爆撃を警戒し、この広い土地の中に分散して建てられた。軍事施設だったので、当時の建物の配置や写真を入手することはできなかったが、終戦直後にアメリカ軍が撮影した航空写真をみると様子が分かる。この建物の一部は後に釘工場として使われている。

### 近くに陸軍官舎も建築

兵器補給廠に勤める将兵の住宅として陸軍官舎が、今の白石小学校の東側に同じ昭和19年10月に建てられた。この官舎には陸軍中佐をはじめとした将校13戸、下士官及び軍属<sup>はくちゅう</sup>32戸、計45戸が住んだ。さらに現在の白中公園(平和通2丁目南4)には2棟を廊下でつないだH型兵舎が建てられ、50人ほどの兵士が寝泊まりしていた。

### 今も健在、払い下げ官舎

将校官舎は各戸に風呂がついていたが、他の官舎の住人のためには共同の浴場があって、官舎の奥さん方が毎日3人ずつ交代で風呂を沸かしに通った。当時は浴槽が一つしかなかったため、男湯と女湯が1日交代となっていた。石炭と薪で沸かす五右衛門風呂で、畳3枚ほどのスノコ板が浴槽の中に敷いてあった。終戦後小川家が払い下げを受けて民営の浴場として「駒の湯」が営業を始め、長く親しまれたが、平成9年9月15日、敬老の日を最後に廃業した。

### 当時としては斬新なメートル法やコンクリートを使用

これらの官舎は当時としては珍しく、メートル法で建てられていた。そのため襖<sup>ふすま</sup>や戸は普通より幅広くできていた。ただ畳は普通の寸法だったため、畳の周囲に板が敷いてあった。また基礎も当時一般的だった束石ではなく布コンクリート製だったが、当時のセメント不足を反映してか、砂利の間に少しセメントが混じる程度のコンクリートだった。それでも幅の広いがっちりした基礎だった。また屋根も雪を落ちや



すくするため、<sup>ひさし</sup>庇が中折れのなで肩になっており、独特の飾り板もつけられ、外壁は下見板で、窓には横長の板ガラスがはめ込まれていた。

戦後これらの官舎は希望者に払い下げられたが、そのまま住み続ける人は

いくらもいなかった。本州から来た人が多かったため、故郷へ帰っていったものと思われる。平成8年5月現在、建築当時のままの家は1戸、その面影を残しているのは5戸である。

(鈴木祥覚)